

2026 年 2 月 1 日 降誕節第 6 主日礼拝メッセージ

「実りはどこに 恵みはどこに」

牛田匡牧師

聖書 マルコによる福音書 4章 1-9節

人は何故、宗教を信じるのでしょうか。信仰をしているのは、何のためでしょうか。もちろん、「特定の宗教を信じてはいません」と答える人は、多くいます。むしろ「特定の宗教に対する信仰は、何も持っていません」と答える人が大半でしょう。かつて、そのような傾向は、日本社会、あいまいな日本文化の特徴だと言われていましたが、20 世紀の末からは「キリスト教国」と言われていた欧米諸国でも「世俗化」と言って、教会にほとんど行かない人が増え、むしろ主流になって来ました。もはや、人々の心の中から宗教や信仰心というものは、消え去っていくのでしょうか。いいえ、たとえ特定の宗教に対する信仰心は無かったとしても、日々の生活を送っている上で、私たちは誰しものが、様々なことやもの、接する相手の人々に対する基本的な信頼感を持っています。

例えば、「今、自分の前にいる人は自分に危害を加えてくることはないだろう」「差し出された食事には毒は入っていないだろう」「今から乗る電車やバスは、事故に遭うことなく、予定通りに目的地に到着するだろう」「今日、眠りにいたら、明日もまた朝がめぐってくるだろう」……。そのような様々なことに対する信頼感があるからこそ、私たちは毎日を平穩に過ごせているのであって、それらの一つ一つを疑い始めたら、不安で不安で仕方なく、とても落ち着いてなどいられないのではないかと思います。よく「人や物の価値は失ってみてから気付く」と言われますが、そのような平穩な日常に、何かしらの亀裂が入った危機の時に、多くの人はその背景にあった目に見えない大きな存在、私たちが「神」と呼ぶ、この世界を支えるものを意識するのではないかと思います。

「どうしてこんなことが起こったのか」「この世界はどこへ行こうとしているのか」「自分はどのように生きてらよいのか」そのような問いに、昔から「宗教」は、答えて来たのではないのでしょうか。先週、私たちはヘブライ語聖書の「申命記」を読みました。そこでは人は神から「私はあなたの前に命と死、祝福と呪いを置く。あなたは命を選びなさい」(30:19)と語りかけられていました。「禍福は糾^かえる縄^{ふく}の如^{あざな}し」という諺^{なわ}もあるように、「幸と不幸が何故あるのか」。何故ならそれは「神の^{ことわざ}

御心によるのであって、神の御心に従えば祝福され、或いは逆らえば呪われる」……。そのような因果応報的な考え方は、洋の東西を問わず、全世界的に大昔からあったのだと思います。

言い換えれば、人が宗教を信じる最初の理由は、「不幸になりたくない。幸せになりたい」という素朴なものなのではないでしょうか。それこそ日本におけるお正月の初詣の様子などは、分かりやすいものだと思います。7割8割以上の人々が「特定の宗教に対する信仰心は持っていません」と答える一方で、初詣に行って「今年もよい年になりますように。事故や病気に遭いませぬように」と祈願しない人は、ほとんどいないのが現状でしょう。キリスト教の教会で、時々「日本の伝統宗教はご利益宗教だけども、キリスト教はご利益宗教ではない。何故なら個人の幸福を願い求めるのではなく、天の神様の御心が実現することを願い求めるからだ」などと語られるのを聞くことがあります。しかし、本当にそうでしょうか。そんなにも簡単に明確に区別できるのかと言うと、私は疑問です。何故ならそのような言葉の後ろには、「天の神様の御心に従う者は、豊かに祝福され、救われ、死後も天国が約束されるし、現世でも富と名声、健康が与えられる」という「繁栄の神学」が見え隠れしているからです。

そしてそれは何もキリスト教の教会だけの話でもありません。例えば、今回の衆議院議員選挙で長きに亘って連立していた自民党と決別して、立憲民主党と手を組んだ公明党、創価学会も似たようなものだと思います。日蓮上人の教えに従って正しく生きること、それぞれの人の因果、宿業、宿命が転換されていく。そしてまたその正しい教えを広く世に宣べ伝えていく「広宣流布」、キリスト教でいう所の宣教が求められている、ということで、それが具体的には公明党に対する選挙活動に結びついてきたのだと思います。ですが、元々は高度経済成長期に、地方から都市部に大勢の人々が一斉に移動してきた。それまで地縁血縁でつながって来ていた人たちが、それらと切り離されて不安の内に右往左往していた。そのような人たちを新たな関係性の中につなぎ直したのが、会社組織であったり、創価学会などの宗教だったりしたと考えられています。そして、そのようにして暮らしている間に、日本社会は戦後の焼け野原から復興し、どんどん発展し、人々の所得は何倍にもなり生活も目に見えて変わっていったという時代の変化の中で、それらは信仰心のおかげだと受け止めた人たちも多かったのだと思います。

しかし、社会の右肩上がりの繁栄が止まって久しく、少子高齢化で社会全体が衰退期に入っている今日、日本だけではなく、いわゆる北側諸国はこれまでの「神を信じ、神に従順に従っていれば、神は私たちに繁栄を与え、保証してくれる」という信仰からの卒業が、求められているのだと思います。そもそも、2000 年前のパレスチナ、ガリラヤ地方に生き、この地上を歩んだイエス・キリストの示した福音も、「あなたたちは、私に従えば不幸な目に遭わず、幸福になれるよ」というものではありませんでした。

今回の聖書のお話は、いわゆる「種を蒔く人のたとえ」でした。種を蒔く人が蒔いた種が、4 種類の地面に落ちて、それぞれの結末を迎えるというのは、如何にも文字で書かれたのではなく口伝えて語り継がれて来た口頭伝承の、いわゆる「昔話」らしいお話です。この話を聞きに来ていた「おびたしい群衆たち」も、ほとんどが農民でしたから、このたとえ話は、自分たち自身の経験からしても分かりやすいお話だったでしょう。先に歌った二つの賛美歌も、このたとえ話をテーマにした賛美歌でしたが、「おぎのたねまきます」というこどもさんびかは、まさにそのままでの歌でした。道の上に落ちた種は、鳥に食べられ、石地に落ちた種は日に焼かれ、茨の藪の中に落ちた種は覆われ負けてしまっって伸びられない。けれども良い地に蒔かれた種は、すくすく育って 30 倍、60 倍、100 倍にもなった。だからこそ「私たち自身も『よい土地』になって、たくさんの実りを得られるようになります」。そのように、理解されることが多かったのではないかと思います。最初に歌いました方の賛美歌「蒔かれた種」もそうでした。

しかし、このたとえ話を聞いていたガリラヤの農民たちの視点、経験から改めて考えてみますと、このお話が伝えていることは、「あなたたちも『良い土地』になささいね」ということなのではないでしょうか。どうでしょうか。ヘブライ語聖書の中には、古代イスラエルの人々の歴史の中で、何度も飢饉が起こっています。バッタ、イナゴの災害にも襲われています。そのような経験、記憶を持つ人々です。また多くの人々が借金の形として先祖伝来の田畑を奪われ、小作農になっていましたから、収穫してもその実りは自分たちの手元にはほとんど残らないような状況でした。そのような状況の中でしたから、貴重な種を袋の中から鷲掴みにして所構わず投げ散らかすような方法で、種を蒔くような人はいなかったのではないかと思います。

ですから、このたとえ話でイエス様がガリラヤ地方の貧しい農民たちに語り伝え

られたのは、「沢山の実りを得るために、どのような地面に種を蒔くべきか」という話ではありませんでした。そのような話はあえてするまでもなかったわけです。そうではなくて「神様の気前の良さ」、普通は無駄になるのが分かっているから、わざわざ種を蒔かないような所にも、どんな所にも惜しみなく「神の言葉」という種を蒔く神様の気前の良さを表わして話されたたとえ話だったのだと思います。

しかも、ここで言われている「良い土地」とは、よく耕され手入れされている高級な土地という意味ではなく、むしろパレスチナの丘陵地帯で低みにあり、雨風で上の方から栄養価に富んだ肥沃な土壌が流れて来る地面のことでした。言い換えると、社会の底辺にいるあなた方、社会の中央や上層部から見た時には、神から遠く離れて見放され、神からの祝福も受けられていないように思われていた貧しい、身分も低いあなた方こそが、実は豊かな実りをもたらす良い土地なのだ。全ての人に神からの命は豊かに、気前よく分け与えられている。全ての命と共に、神の言葉であるイエス・キリストは紛れもなく共におられる。だから、大丈夫。あなたは今日もこれからも、この地で自分の足で立っていける……。それが 2000 年前に、イエス様がこのたとえ話を通して、人々に伝えたことだったのではないかと思います。

何かを持っているからこそ祝福されたり、何かをしたからこそ恵まれたりする。長時間のお祈りだったり、高額な献金だったり、熱心な奉仕活動だったり……。それらを熱心にたくさんするから、神様から特別に顧みられて祝福される、幸せになれる、のではありません。そのようなものは何も関係がないというのが、神様の気前の良さです。それにも拘らず、つついそのように考えてしまうのが、私たち一人ひとりの心の狭さであり、人と自分を比べてしまう心の小ささなのだろうと思います。イエス様が伝えられた福音、救いとは、そのような人間の側の条件とは関係なしに恵みが与えられていること、イエス様がいつも共にいてくださること。そして実りは最も低い所にこそ豊かに与えられることです。

だからこそ、私たちは「不幸にならないように」「呪われないように」と、ビクビク恐れて必死になる必要もなければ、「幸福になりたい」と必死になる必要もありません。ただ神様の恵みに感謝して、神様が確かに共にいてくださることに信頼して、私たちは今日も与えられた命を生かされて参ります。